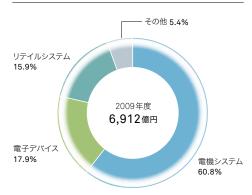
# 部門別事業概況

富士電機グループは、「エネルギー・環境」分野における ソリューションビジネスを推進するために、事業セグメント を2010年4月1日付で変更しました。このページでは、 2010年3月期のセグメント別の業績概況を変更前のセグ メント(2010年3月31日まで)に基づきご説明し、P.32以 降は、今後の方針を中心に新セグメントに基づきご説明 します。

#### 売上高構成比(セグメント変更前)



\* セグメント間の内部売上高消夫前の構成比を表示。

### 電機システム部門

売上高は前期比9.7%減の4,428億62百万円となり、営業利益は前期比22.4%増の131億2百万円となりました。なお、当期の受注高は2,586億円(富士電機システムズ(株)の電機システム部門および富士電機機器制御(株)単独ベースの合計)となっています。

ドライブ分野は、汎用インバータや小型モータなどコンポーネント品について、年度後半にかけて中国を中心に物量は回復基調となったものの、市況悪化の影響を受け、売上高、営業損益とも前期を下回りました。

オートメーション分野は、計測機器などコンポーネント品の物量の減少などにより、売上高は前期を下回りましたが、営業損益はコストダウンなどにより若干上回りました。

産業プラント分野は、海外向け大規模 整流器設備の大口案件などで実績を挙 げましたが、売上高は前期を下回りました。 営業損益はコストダウンなどにより 前期を上回りました。

発電プラント分野は、海外向け火力発電設備の大口案件の減少により、売上高は前期を下回りましたが、営業損益はコストダウンなどにより前期を上回りました。

工事部門は、連結子会社2社と古河総合設備(株)との合併により売上高、営業 損益ともに前期を上回りました。

器具分野は、第4四半期以降、機械メーカー向け需要の持ち直しや、アジア向け需要の回復があるものの、国内、海外ともに市況悪化の影響により売上高、営業損益ともに前期を下回りました。





#### 電子デバイス部門

売上高は前期比8.0%減の1,303億21百万円となり、営業損益は前期に比べ199億1百万円改善し、111億21百万円の損失となりました。なお、当期の受注高は1,310億円(富士電機システムズ(株)の電子デバイス部門および富士電機デバイステクノロジー(株)単独ベースの合計)となっています。

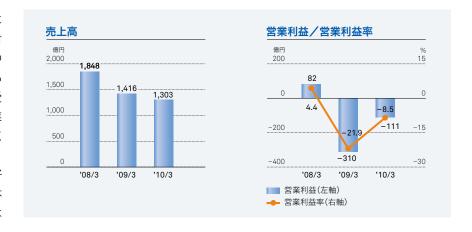
半導体分野は、アジア市場を中心に PC、薄型テレビ関連の需要回復や環境対応車の需要増に加え、第3四半期以降の 産業向け半導体需要の急回復があったも のの、年間では世界経済悪化の影響を受 け、売上高は前期を下回りました。営業 損益は事業構造改革による損益分岐点 の引き下げにより赤字幅を縮小しました。

ディスク媒体分野は、HDD市場が好調に推移するなか、3.5インチアルミ媒体では500GB、2.5インチガラス媒体では

160GBおよび250GBを主力製品として、新たに製品系列に加わった2.5インチアルミ媒体も出荷を伸ばし、第3四半期以降、順調に推移しました。売上数量は増加しましたが、価格下落と為替の円高影響により売上高は前期並みとなりました。営業損益は事業構造改革の効果

により前期に対し赤字幅を縮小し、第4 四半期では黒字化を達成しました。

感光体分野は、売上数量は増加しましたが、価格下落と為替の円高影響により 売上高は前期並みとなりました。営業損益は合理化とコストダウンの推進により 前期を上回りました。



## リテイルシステム部門

売上高は前期比14.9%減の1,160億29百万円となり、営業損益は前期に比べ6億24百万円悪化し、10億99百万円の損失となりました。なお、当期の受注高は1,156億円(富士電機リテイルシステムズ(株)単独ベース)となっています。

自販機・フード機器分野は、環境対応型自動販売機を中心に拡販を図ったものの、飲料・食品メーカーの投資抑制の影響を受け、売上高は前期を大幅に下回りました。営業損益は売上高減少および物量減少に伴う操業調整の影響により前期を下回りました。

通貨機器分野は、自動つり銭機や電子マネー関連機器の大口案件の減少により 売上高は前期を下回りましたが、コスト ダウン、固定費削減等により営業損益は 前期を上回りました。

コールドチェーン機器分野は、省エネルギー技術の展開による環境店舗の総

合提案を行い、拡販に努めましたが、店舗の新規出店減少およびそれに伴う価格競争の激化により売上高、営業損益ともに前期を下回りました。

